図書館だより

NO.27
令和元年12月2日発行
函館工業高等専門学校

仮設図書室の様子

目次

私の読書 …… 1
特集 学生の読書感想文 ……2・3
退職教員の読書のすすめ ……4
新着任事務職員からのおすすめ本 ……5
私と図書館 ……6
図書委員の活動報告 ……6
図書委員 活動の記録 ……7
図書館改修工事の様子 ……7
本校教員執筆図書紹介 ……8
編集後記 ……8

私の読書

図書館長 澤村　秀治

「風は全くない。東の空に入道雲が、高く陽に輝いて、くくりつけたように動かない。ストローブ松の林の影が、くっきりと地に濃く短かった。その影が生あるもののように、くろぐろと息づいて見える。」これは、旭川市神楽の夏の外国樹種見本林をとても印象的に描写した小説『氷点』の書き出しの部分です。あまり本を読む習慣のない私ですが、実は三浦綾子さんの静かなファンであり、この『氷点』をはじめ、『道ありき』『泥流地帯』『塩狩峠』などなど、代表的な作品はすべて読んだと思います。

仕事や旅行で旭川に行くときには、思い出したように三浦綾子さんの本を読み返し、朝のジョギングなどで物語の舞台となった場所を訪ねてみます。その中でもやはり、外国樹種見本林はお気に入りのスポットですね。ストローブマツ、ドイツトーヒなどの黒っぽい背の高い木々の間を抜け、美瑛川の河原まで続く小道を、「陽子もこの道を･･･」と思いながら歩き、見本林の入り口では、「啓造の家はこのあたりか？」などと思いを馳せます。

私はクリスチャンではありませんが、三浦綾子さんが作品の中で描く信仰に根差した価値観、世界観が好きで、自分もそうありたいと願っています。また一方で、描かれる人の弱さに自分を重ね、「う～ん」と考えさせられることもあります。日々の生活に流されていると、せっかく本を読んだときに心に灯った思いも薄れていってしまうので、これからも時々、作品を手に取って、心の灯を消さないようにしたいと思います。

もう一つ、土木技術者の自分として絶対に外せない旭川のスポット、それは旭橋です。土木学会選奨土木遺産、昭和7年竣工、ブレーストリブ・キャンチレバータイドアーチ橋、存在感満点の鋼橋です。もちろん、三浦綾子さんの作品にも登場します。ここを訪れるときには、必ず写真のロッキングカラムに会いに行くことにしています。

神楽外国樹種見本林

旭橋とロッキングカラム

学生の読書感想文

泊先生のビブリオバトルの授業で
チャンプになった本の読書感想文です。

「カラフル」を読んで

タイトル：カラフル
著 者 名：森　絵都
出 版 社：理論社

2年生産システム工学科
機械コース
細越　大輝

この本を読む前と読んだあとでは自分の感情との接し方が大きく変わると思います。実際に私も変わりました。なぜなら、カラフルの内容は思春期の子供の環境の変化や心情の変化に対する悩みや苦しみをこれでもかというほど大きく痛苦に表現しているからです。この作品で出てくる苦難は、両親の卑劣さを感じた時、兄からの嫌がらせを受ける時、学校のクラスになじめず居場所がない時、勉強の遅れを心配された時、好きな子が遊女であることを知った時などがあります。それらが一気に主人公に襲い掛かり自殺し、その体に死んだ犯罪者の魂が入り込むところから物語は始まります。その後入り込んだ魂が前世の記憶を取り戻すために主人公の苦難を何とかしてかいくぐり生活していくストーリーになっており、その時々の行動や感情に共感できる部分が多く、読み進めていて飽きる部分がなく、すらすら読める作品だったので普段本を読まない私でも読み進めることができました。

「英国一家、日本を食べる」を読んで

タイトル：英国一家、日本を食べる
著 者 名：マイケル・ブース
出 版 社：亜紀書房

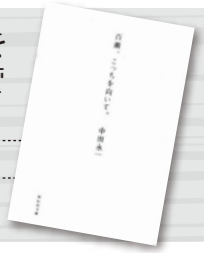
2年生産システム工学科
電気電子コース
小林　正信

イギリスの料理は不味い、と本人達ですら自虐的なネタにして話す。この本は、そんなイギリスから極東の我が国にやってきた英国人一家が日本の様々な料理を味わった旅行記である。普通、外国人が日本料理と聞いてイメージするであろう料理はスシ、テンプラなどだろう。だが、著者のマイケル・ブース氏はお好み焼きやラーメンなど、我々が普段何気なく食べている料理から高級懐石料理まで幅広い分野の"日本"を味わった。ラーメンなどの章を読むと、普段考えていないほど実は奥が深いものだということに気付かせてくれる。単純な味覚についてだけでなく、日本の文化的背景まで捉えた食の考察も見所である。また、鋭いブリティッシュジョークもしっかり翻訳されこの本に引き込まれる魅力の一つである。

最後に、この本をお昼前や深夜に読むことは大変危険である。お腹が鳴って止まらなくなってしまう！

「百瀬、こっちを向いて。」を読んで

タイトル：百瀬、こっちを向いて。
著 者 名：中田　永一
出 版 社：祥伝社



2年生産システム工学科
情報コース
長内　隆哉

この作品は「乙一」というミステリーを中心に書いていた作家が中田永一名義に変わった後の有名な恋愛小説のひとつです。この小説は全４編からなる短編小説で私は特に第一編の「百瀬、こっちを向いて。」がお気に入りです。ちょうど「高校生」の年代には読みやすく多くの共感もできるし何とも言葉に表せない青春ならではのモヤモヤした感じを文章を読むだけで感じることができるからです。また作品の舞台が東京や神奈川といったありきたりな場所でなく久留米だったことにも多少の親近感というものを感じました。作品全体を通し若い世代ならではのウブな感情などをことばでなく文章で表しているところや時折出てくるユニークな表現というものに心を動かされる良い作品だと感じました。

「友罪」を読んで

タイトル：友罪
著 者 名：薬丸　岳
出 版 社：集英社

3年物質環境工学科
木村　玲音

この本の物語は主人公の益田と職場で出会った鈴木が出会い仲良くなっていくがある日鈴木に益田は「僕は人を殺してしまったんだ」と打ち明けられ鈴木が指名手配中の連続児童殺人事件の犯人だったということがわかってしまいます。益田は週刊誌の記者になりたいという夢がありこの事を公に出せば記事にでき夢が叶います。しかし僕はこの本を読んだときに筆者薬丸岳さんの最大の問題提起ともいえる「あなたは心から仲の良い友人が殺人犯だと知ったときそれでも友でいられますか」という言葉が胸に突き刺さりました。もし皆さんは仲の良い友人、家族、恋人が殺人犯だと知ったときどのような行動をとることが正解だと思いますか。僕はこれを読んでも正直答えは出ないままでした。殺人犯というのは世間的、一般的に見れば最悪の人間でありそれ相応の刑が下されて当然です。しかし自分にとって大切な人が殺人犯だと知っても僕は少しでも守ってあげたいと思ってしまうと思います。主人公益田のとった行動が正しいかどうかはわかりませんが皆さんもぜひ読んで自分だったらどうするか、どうすることが自分にとって正解なのかを考えてみてください。

「アレグリアとは仕事は出来ない」を読んで

タイトル：アレグリアとは仕事は出来ない
著 者 名：津村　記久子
出 版 社：筑摩書房

2年社会基盤工学科
正岡　和南

この物語のあらすじは、手先が不器用な訳でもなくそつなく道具やコンピューターを扱い、仕事をこなしていた会社員の「ミノベ」がコピー機に頭を悩ますという物語です。そのコピー機というのが、「アレグリア」でミノベの操作では必ずと言って良いほど使用不可能になります。そして、コンピューターSEを呼んでも原因を突き止める事は出来なく結局解決しませんでした。

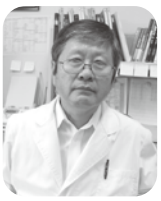
人と人の葛藤ではなく、人と機械の葛藤という新しい世界観で書かれており面白いだけでなく考えさせられる事もあります。また、ミノベがアレグリアに対して本気で怒っているのを見ていた第三者に冷たい目で見られてしまうというシーンも面白さを引き立たせています。最後にこの本は様々なユーモラスな事を織り交ぜて書かれているため活字が苦手な人でも嫌悪感なく読むことが出来ると思います。あまり上手くこの物語に対しての説明が出来ませんが、それだけこの物語の世界は独特なのだと思います。

退職教員の読書のすすめ

生産システム工学科
森田　孝

「推理小説，SF小説の読書三昧で過ごした学生時代」

いつの頃から字を覚え、文章を読みだしたかは覚えていませんが、通っていた保育園にあった小学生向け学習雑誌に毎月掲載されていた絵物語をよく読んでいたのを覚えています。小学生になってからは、毎月届く「学研」の付録の童話集が楽しみになり、高学年になると学校の図書館から本を借りて読むことを覚え、江戸川乱歩の『怪人二十面相』シリーズをすべて読んでしまいました。中学では図書館にあった『海底二万哩』を初めとするジュール・ベルヌ作品群を読破し、世界初の推理小説と言われるポーの『モルグ街の殺人』で推理小説に目覚めてからは、『怪盗ルパン』、『シャーロック・ホームズ』シリーズを読み漁りました。函館高専に入学早々、担任の先生から卒業までに本を少なくとも百冊以上読みなさいとの話があり、それが高専生活の一つの目標となりました。当初は日本や海外の文学を読んでいましたが、ついエラリー・クイーンの『Ｘの悲劇』に手を出してしまってからは、クイーン、ヴァン・ダイン、クリスティーなど、海外推理小説三昧となってしまいました。二年の頃、クイーンの最高傑作とされる『Ｙの悲劇』を教室で読んでいると、すでに読み終えたある級友に犯人名を告げられ、その後は実につまらない読書となってしまいました。推理小説の読者へのネタばらしは厳禁です。その後、本校図書館にあった横溝正史の推理小説はすべて読破し、江戸川乱歩の文庫本もほぼすべて読みました。この頃本町にあった古本屋でよく文庫本を買いました。その他にも小松左京、平井和正らのＳＦ小説群や吉川栄治の『宮本武蔵』など時代小説も読み、卒業時には入学時の目標をはるかに超える二百冊以上を読破することができました。が、結果的にはほとんどがＳＦ・推理小説であり、担任の先生が望んでおられた分野とはかけ離れた読書であったと思います。それでも常にわくわくしながら読書したあの頃の時間は、今でも忘れられません。



物質環境工学科
小原　寿幸

「読書エッセイ」

最近はあまり本を読んでいないので、読書エッセイと言うのには少しおこがましい気がするが、これまでに読んだ本の感想などを述べたいと思う。基本的には、ミステリー（推理小説）が好きである。

もうかなり昔になるが、小学生のときに学校の図書館にあった『シャーロックホームズ全集』は全部読んだ。大学生になってからは、横溝正史や森村誠一の作品に凝り、これも主なところは大体読んだ。アルバイト代の殆どはこれらの購入に消えた気がする。本校の教員になってからは、なかなかミステリーを読む機会が減ったが、それでも若い頃に読んだ『白い巨塔』（ミステリーとは言えないが）は最高である。この作品は何度かテレビ化されたので、ご存じの方も多いと思われる。フィクションではあるが、有名国立大学の医学部を舞台にして、教授選の赤裸々な実態と医事裁判に題材をとり、徹底した取材によって、人間の生命の尊厳と２人の医学部教員の対照的な生き方とを劇的に描き切った、社会派小説の金字塔ともいえる作品であると思う。文庫本で１巻～５巻まである超大作であるが、２日程度で一気に読んだ。近くでは、岡田准一主演でテレビ化されたが、なかなか良くできたドラマであったと思われる。

最近は東野圭吾のものに凝っている。軽いタッチで読めるのが良い。また、読後感がすっきりとしている。一番好きな作品は『白夜行』かな。これも８００ページを超える大作であるが、長さを感じさせず一気に読める。定年退職後は時間がたっぷりあると思われるので、東野圭吾の作品などをじっくりと読んでみたい。また、宮部みゆきの作品も面白そうなので、これも読んでみたい。さらに、『白い巨塔』ももう一度読み直してみたいと思っている。今から楽しみである。

新着任事務職員からのおすすめ本

事務部長
三浦　哲也

タイトル：さがしもの
著 者 名：角田 光代
出 版 社：新潮社

今回、「図書館だより」への執筆依頼を受け、ここ数年、仕事に関係する実用書以外の本を読んでいないことに気が付きました。当然、学生の皆さんに関心を持っていただける本など思いつかないので、読書が好きな妻に幾つか候補を挙げて貰いました。

さすがに読まずに推薦する訳にもいかないので、そのうちの一冊である『さがしもの』という本を読みました。最近は、インターネットで購入して直ぐにスマートフォンで読めるので便利になったものですね。

さて、この本は、中学生から大学生の主人公と「本」との関りを書いた９編からなる短編小説です。内容は、面白い話が多かったですが、何を言いたいのか分からないものもありました。

妻に感想を聞かれ、この事を率直に答えましたが、主人公が女性だったことから、当然、男性より女性の方が共感し易いとは思いますが、改めて「本」は内容が同じでも、読み手の性別や年齢によって、「本」が持つ意味や評価が変わることを実感しました。

１編あたり２０分程度で読めるので、電車やバスでの通学中の良い暇つぶしになるかと思います。

多様な価値観を認め合うことが求められる現代社会においては、女子学生はもちろん、男子学生の皆さんにも、ご一読いただきたいと思います。

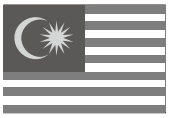
学生課長
須藤　淳一

タイトル：走れメロス
著 者 名：太宰 治
出 版 社：新潮社

文豪「太宰治」の代表作であるこの本に私が出会ったのは、小学生の頃でした。

この物語は古代ギリシャ時代を背景とし、主人公の「メロス」、その親友である「セリヌンティウス」、そして国王の「ディオニス」によって形成されています。「メロス」が「ディオニス」の暴君ぶりに憤慨し暗殺しようと企てるものの、あえなく失敗し処刑を宣告されるが、近く予定している妹の結婚式だけは見届けたい、それが終わるまで処刑は待って欲しい、その間は親友の「セリヌンティウス」を人質とする事を「メロス」より提案されます。これに対し「ディオニス」は、【どうせ裏切って帰って来ないであろうし、所詮「友情」「信頼」などは、空虚な妄想に過ぎない事を人民に対し思い知らせたい】と考え付き、３日以内に再びこの地に戻らなければ「セリヌンティウス」を代わりに処刑する事を条件に猶予が与えられます。妹の結婚式を無事に終え、再び処刑の地に戻る「メロス」の前に、「ディオニス」が差し向けた山賊の襲撃や立ち塞がる濁流の川等、数々の困難を乗り越え、疲れ果て幾度も倒れながらも、最後の力を振り絞り負けそうな自分の気持ちを鼓舞し走り続けた結果、ギリギリ戻ることに成功します。「メロス」はそのまま戻らず逃げようと、また「セリヌンティウス」は彼が裏切ったのではないかと、お互い一度脳裏をよぎった事を素直に告白し、友情を再確認するその姿を見た「ディオニス」は２人の「強い友情」「熱い信頼」に強い感銘を受け、改心し処刑をやめるというのが、簡単ですが全体のあらすじです。

興味を持たれた方は、是非手にとって一読される事をお勧めします。表現も易しく描かれており、非常に読みやすいです。



私と図書館

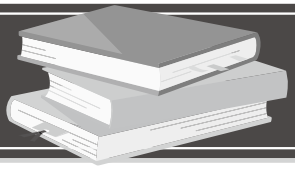
４年生産システム工学科機械コース
ユー
(YU JIA XIN)
留学生（マレーシア出身）

母国のマレーシアは多民族国家であるため、図書館には様々な言語の書籍が所蔵されている。共通語である英語の本がメインだが、マレー語と中国語の本も数多くある。小学校の頃、隔週で英語とマレー語と中国語の本を読んでそれぞれの読書感想文を提出しなければならなかった。だから、よく図書館で時を過ごした。それをきっかけに読書が好きになった。

それから十年以上経った今でも、本の表紙を開けば別世界に一瞬で行けるという魔法にずっと魅せられている。英語の小説の中でのベストなら、マークース・ズーサックの『本泥棒』という小説がまず頭に浮かぶ。

第二次世界大戦下のドイツのある貧しい町で、父と弟をなくし里子に出された少女が、不器用で乱暴だが繊細で温かい心を持った人々と織りなす物語である。ナチス政権下のドイツを舞台に、優しい死神を語り手にして、未だにひどく胸に刺さるような美しくて悲惨な物語である。

図書委員の活動報告



<書店で本を選ぶということ>

１年１組　田久保　祐生

「書店で本を選ぶ。」私はいつからか、そのことをするのが面倒になっていた。その理由としてはネット通販の人工知能とレビュー機能で楽をしていたからだろう。最近の私はAmazon　kindleで電子書籍を読んでいる。紙媒体の本を買ったとしても、Amazonや楽天というネット通販で注文するばかりであった。

しかし、今回私は実際に本に触れて買うことの重要さと楽しさを参加したブックハンティングで気づいた。そう思ったのは、予想外の本に出逢った時である。正直言ってネット上の買い物は完璧だ。しかし、完璧すぎてイレギュラーな事態が起こらない。当たり前の中の当たり前なのだが本の話も常軌を逸したことが起こるから興味を惹かれるのである。本選びもこのようなことが起こるからこれほどに電子書籍が発達した世界でも、書店で本を選ぶ人がいるのだと思う。私はこの行事から暫くした日、蔦屋書店に行き3冊の本を全てイレギュラーな出逢いと共に購入した。

<ビブリオバトルを終えて>

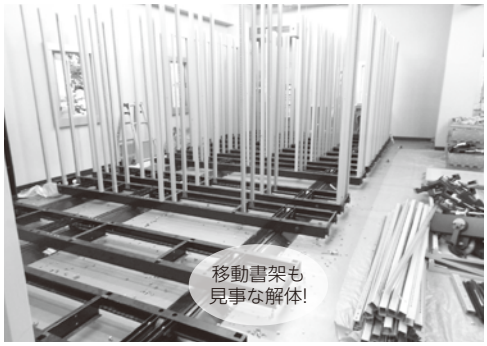
５年生産システム工学科
機械コース　佐々木　祥汰

私は初めてビブリオバトルに参加したが、とても良い体験をしたと思う。大勢の観客がいる中、自分のお勧めの本について身振り手振りで魅力を伝え、「面白い！」と思わせるような紹介をするのがこのイベントだが、紹介は５分という短時間なので、いかに本の見所を紹介するかが他の紹介者（バトラー）との勝負所だろう。今回のビブリオバトルで私は『ハッピーな部活のつくり方』という本を紹介し優勝することができだが、私の他にも２名の優勝者がでた。１人は田中美咲希さんで『古代日本の超技術』、もう１人は阿部吏槻くんで『戦艦大和復元プロジェクト』だ。この２人は、とても分かりやすい発表で内容がすぐに理解できた。またこのほかにも、小島響くんの『卵はどのようにして親になるのか』、竹本優さんの『桜のような僕の恋人』、東福遥圭さんの『春寿堂の怪奇帳』などもお勧めの本なので、ぜひ読んでみてほしい。

図書委員活動の記録

2020年春
図書館リニューアルオープン!!

2019年6月より改修工事のため図書館は閉館・仮設図書室での貸出を行っております。



本校教員執筆図書紹介

下郡　啓夫(一般系)

『世界のワールドクラス－21世紀の学校システムを作る』(明石書店)

p166-239 第4章 なぜ教育の公平性はわかりにくいのか 翻訳

科学技術や国際化の進展により、学習・教育環境も大きく変化しようとしている。OECD生徒の学習到達度調査（PISA）の創始者であり、今なお世界の教育改革に携わっているシュライヒャーOECD事務総長教育政策特別顧問兼教育・スキル局長が、長年の国際調査によるエビデンスに基づき、21世紀に向けた新たな学校システムを考察する。

泊　功(一般系)

『三田文學』春季号2019 (三田文学会)

p142-162 プロメテウスの火 翻訳

『三田文學』は慶応大学が発行する伝統ある純文学雑誌で初代編集長は永井荷風。芥川龍之介や谷崎潤一郎もその主要な作家だった。それが2019年春号において初めて純文学でないＳＦ特集を組むことになった。オバマ元大統領も愛読者だという劉慈欣『三体』の影響で世界は今中国ＳＦブームだが、私は今号で中国ＳＦ四天王の一人王晋康さんの「天火」（プロメテウスの火）を翻訳した。物理の天才少年が壁抜け術に挑む話だ。また、作者の王晋康さんとも二度お会いしている。

中村　和之 (一般系)

『金・女真の歴史とユーラシア東方』(勉誠出版)

p293-309 元・明時代の女真(直)とアムール河流域 執筆

アジア遊学というシリーズの『金・女真の歴史とユーラシア東方』という特集に、「元・明時代の女真（直）とアムール河流域」を分担執筆しました。女真人は、中国の北半分を支配した金という王朝（1115～1234 年）を建てた人たちです。女真人の子孫は、満洲人と名のって清朝（1616～1912 年）を建てました。この論文では、金朝が滅亡した後の、女真人の歴史を概観しました。

編　集　後　記

執筆して下さった学生さん、教職員の皆様のご協力により、今年も「図書館だより」ができました。心よりお礼申し上げます。学生さんの書いてくださった文章やビブリオバトルで選ばれた本をみていると、工学以外の分野にも、恋愛から妖怪までいろいろな事に興味を持ち、考え感じているのだということが伝わってきます。そして私も皆さんと同じ学生だったころに大好きだった本をもう一度読んでみようという気になりました。

（丸山　珠美 記）

図書館だより NO.27

独立行政法人　国立高等専門学校機構
函館工業高等専門学校　図書館

函館市戸倉町14番1号
TEL　0138-59-6314

表紙題字：社会基盤工学科教授　平沢 秀之